

(注)本稿は「中東協力センターニュース」2010年2/3月号に掲載されたものです。

GCC 諸国の王家・首長家 (第7回)

サウジアラビア・サウド家

目次	頁
1. サウド家の歴史	1
2. アブダッラー現国王と有力王族	3
(1) 王族閣僚	3
(2) 王族州知事	5
(3) 王族高級官僚	5
(4) 有力ビジネス王族	6
3. 後継者問題	7

1. サウド家の歴史¹



サウジアラビアはアラビア半島の大半を占めており、面積は215万平方KM(日本の約5.7倍)、人口は2,400万人、サウド家が支配する王国である²。そもそも「サウジアラビア」とは「サウド家のアラビア」という意味であり、支配一族の名前が国名の一部をなしている国家は世界的にも珍しく、同国以外ではイスラームの開祖ムハンマドにつながる名門ハシミテ家の名を冠したヨルダン(Hashemite Kingdom of Jordan)だけであろう。

サウド家の歴史は18世紀初頭にさかのぼる。

始祖サウドは当時アラビア半島中央部、現在の首都リヤドのはずれにあるオアシス、ディルイーヤの支配者であった。同じ頃、アラブの唯一絶対性を説く「サラフィー運動」に傾注していた若いイスラーム法学者ムハンマド・ビン・ワッハーブが「ワッハーブ派」と称される布教活動を行っていた。1725年にサウドが亡くなるとその息子ムハンマド・ビン・サウドは、ムハンマド・ビン・ワッハーブと盟約を結びアラビア半島中央部(ネジド地方)の部族制圧に乗り出した。二人のムハンマドは、宗教と政治を一体化して勢力を拡大したのである。これがサウド家の原型となる「第一次サウド王朝」である。

その後 19 世紀に生まれた第二次サウド王朝は 1891 年ラシード家との戦いに敗れ、当時 11 歳のアブドルアジズ(後の第三次サウド王朝初代国王)など一族郎党はクウェイト首長サバーハ家のもとに亡命した。

サウド家とラシード家の抗争及びクウェイトのサバーハ家がサウド家の亡命を受け入れた理由は単なる部族間の対立或いは同盟関係によるものではない。当時の英国はイエメン、オマーンなどに植民地を築き、ペルシャ湾を制して内陸部へ進出する機会をうかがい、クウェイトを保護領とすることに成功した。さらに英国はサウド家とラシード家の抗争を利用してアラビア半島からオスマン帝国の勢力を駆逐することを画策、クウェイトにサウド家の亡命を受け入れさせてサウド家を温存しようとしたのである。ラシード家とサウド家の部族抗争はオスマン帝国と大英帝国の代理戦争に仕立てられたと言える。

サウド家嫡男のアブドルアジズは 21 歳になった 1901 年 11 月、わずか 40 人の部下を引き連れて数百キロの砂漠を横断、翌年 1 月リヤドに到着すると夜陰にまぎれて砦を急襲し、ついにラシード家からリヤドを奪還した。こうしてサウド家によるアラビア半島統一が始まった。1904 年春までにアブドルアジズは半島中央部のネジド地方を制圧、1913 年には東部アル・ハサ地方を攻略した。アル・ハサは、後年その地下に巨大油田が次々と発見され、サウド家及び国民に莫大な富をもたらすことになる。

サウド家の版図が広がるとともにアブドルアジズは、ある時は彼に従い別な時には離反する気まぐれな遊牧民ベドウィンに悩まされた。そこで彼はオアシスに入植地を建設して遊牧民を定着させることにした。入植者たちはサラフィー(ワッハーブ)運動に共鳴する同胞として「イフワーン(同胞団)」と名付けられ、アブドルアジズの軍事作戦の中核となりアラビア半島統一の大きな力となった。1925 年にはアブドルアジズとイフワーン軍団はハシミテ家のヒジャズ王国を駆逐し、アラビア半島全域を統一、1932 年に「サウジアラビア王国」の建国が宣言された。

半島統一に至る過程でアブドルアジズは多くの部族と戦闘或いは和睦を行った。そしてサウド家に恭順の意を表した部族に対しては従来どおりの領地支配を認めた。彼はこれら恭順した部族がサウド家に二度と反旗を翻すことがないように、また遠征当初から同盟を結んだ部族とは信頼関係をさらに深めるためにかれらとの姻戚関係を深めた。彼に従う部族長の娘をアブドルアジズ自身が娶り息子或いは娘を生むことでサウド家と彼らとの絆を確かなものにしようとしたのである。

彼が 26 人の女性に 36 人の王子を生ませたことはサウド家の家系図ではっきりしている。36 人の王子は俗に第二世代と呼ばれるが、彼らの子供達(即ち第三世代)を含めサウド家は今や第六世代まで誕生しており、王子の数は千人を下回らないものと推定される。かれら第三次サウド王朝の王族は「狭義のサウド家王族」であるが、これに対して第一次サウド王朝に遡るスナイヤーン家、第二次王朝時代に生まれたジャラウィ家、さらにはアブドルアジズの兄弟系統に当たる大サウド家(サウド・アル・カビール)など、アブドルアジズ直系以外にも多数の一族がおり、彼らは「広義のサウド家王族」と呼ばれる。巷間でサウド家王族

の総数が数万人と言われるのはこれら狭義・広義の王族を全て含めた場合を指しているのである。

サウジアラビア王国の建国が宣言された同じ 1932 年に米国のソーカル社がバハレーン島で石油を掘り当てている。同社は対岸のアラビア半島も有望な油田地帯であると判断し、アブドルアジズに石油利権の供与を申し入れ、1936 年に油田を掘り当てた。こうして米国主導による本格的な石油の開発が始まった。石油はサウジアラビアに大きな富をもたらし、アブドルアジズはその富を教育、インフラ整備などに投じた。1950 年代には、主要都市を結ぶ道路網の建設が始まり、1951 年には首都リヤドと東部ダンマン間を走る鉄道も開通した。またアラビア半島の東西を結ぶ航空路、ジェッダ港の整備、電話網の拡充など国内開発が急速に進んだのである。

1953 年にアブドルアジズが亡くなると、彼の息子サウドが第二代国王に即位した。サウド以降現在のアブダラー第六代国王に至るまでの 5 人の国王はいずれもアブドルアジズの息子達である。但し彼らは全て母親が異なる異母兄弟である。サウド第二代国王(在位 1953 年～1964 年)は、父アブドルアジズが敷いた路線を踏襲し、教育省、商業省など行政組織の拡充を図り国内政治の基礎固めを行った。しかし彼の浪費癖により国家財政が破綻に瀕したため、1964 年に一族の長老会議で退位に追い込まれた。

サウドに次いで第三代国王に即位したファイサル国王は英明君主の呼び声が高く、第一次五カ年計画を制定して国内経済の発展に努めた。彼の名前を世界に知らしめたのは 1973 年の第四次中東戦争に際してイスラエルとその支援国に対して石油の禁輸措置を発動したことである。これが有名な「第一次オイルショック」であり、石油を武器とするこの戦略は日本を始めとする石油消費国を震撼させた。しかし彼は急速な近代化に反対するサウド家王族の一員によって 1975 年に暗殺されている。

その後ハーリドが第四代国王となったが病弱であったため短命政権に終わり、1982 年にファハドが第五代国王に即位した。同国王は 1986 年に「二大聖都の守護者(Custodian of Two Holy Mosques)」を名乗ると発表した。二大聖都とはイスラームの三大聖地の中のマッカとマディナのことであるが(残る一つはエルサレム)、この称号は世俗君主であるサウド家の支配体制に宗教的権威付けを行ったものと解釈される。彼は豊かなオイル・マネーと強い指導力を駆使して道路、空港など国内のインフラ整備を行った。しかし治世晩年に病気のため執務不能となり、1995 年以降は皇太子のアブダラー(現国王)が実質的に国政を取り仕切った。ファハド国王は 2005 年に亡くなり、アブダラーが第六代国王に即位、皇太子にはファハドの実弟スルタン国防相が指名されて現在に至っている。

2. アブダラー現国王と有力王族

(1) 王族閣僚

サウジアラビアはサウド家が絶対的な権力を握っており、更にその中でも国王にほぼ全ての権力が集中する極端な専制的中央集権国家と言える。国王は行政・立法・司法の三権およ

び外交・軍事はもとより、宗教についても絶対的な権力を有しており、その権力の一部を他の王族が担う形をとっている。



アブダラー国王は二大聖都(マッカ及びマディナ)の守護者を称し、同時に首相を兼務、さらに国家警備隊の最高司令官でもある。首相職については第三代ファイサル以来、国王が首相を兼務することが慣例化していたが、ファハド国王時代に制定された統治基本法でそのことが正式に明文化された(同法 56 条)。国家警備隊はサウド家に忠誠を誓う部族で構成されており、サウド家が国内の諸部族を懐柔するための有力なツールである。アブダラー国王の国内基盤が盤石と言われるのもこれによるところが大きい。



国王に次ぐ No. 2 は第一副首相及び国防航空相を兼務するスルタン皇太子である。彼の母親ハッサ妃は名門スデイリ家の出身で、初代国王との間に 7 人の男児を産んだ。このため彼ら 7 人は「スデイリ・セブン」と呼ばれているが、長兄のファハド前国王亡きあとはスルタンが「スデイリ・セブン」のリーダーである。スルタンは 1926 年(1928 年或いは 1924 年説もある)生まれで、1947 年にはわずか 21 歳の若さでリヤド州知事となり 1962 年には国防航空大臣に就任、大臣の在任期間は実に 50 年近くにわたっている。1982 年にファハドが第 5 代国王兼首相に即位した時、彼は皇太子兼第一副首相にアブダラー(現国王)を指名し(同国では皇太子が第一副首相を兼務することが慣例となっている)、同時に実弟スルタンを第二副首相に指名した。これは将来、スルタンの皇太子ポストを確実にするための布石であり、実際 2005 年のファハド没後スルタンはアブダラー新国王から皇太子に指名されたのである。スルタンは 50 年近くにわたる国防相の在任期間を通じてアブダラー国王に比肩する権力を築きあげた。しかし一昨年末に手術のため渡米した後、モロッコにおける療養を含め 1 年近く国を離れており、高齢に加え健康面で将来が不安視されている。



このほかの有力な王族閣僚としてはスルタンの実弟ナーフ内相(写真)及びファイサル第三代国王の子息サウド外相があげられる。ナーフ内相はアブドルアジズ初代国王の 23 番目の息子であり、「スデイリ・セブン」の 5 男である。彼は 1933 年生まれで今年 77 歳になる。リヤド州知事(1953-54 年)、内務副大臣(1970 年を経て 1975 年に内務大臣となり、現在まで 35 年間にわたりその地位を保っている。彼は実兄のスルタンに比べ表舞台に顔を出すことは少なかったが、2003 年のイラク戦争後に国内でテロ事件が続発するとテロ対策に力を発揮した。これを契機にナーフ内相は国王と皇太子を補佐する No. 3 としての地位を確立し、特にスルタン皇太子兼第一副首相が手術のため 1 年近く国を離れている間、国王に次ぐ立場で国政に関与してきた。国王と皇太子がそれぞれ首相と第一副首相をつとめるサウジアラビアでは、首相代行となるべきスルタンがいなければアブダラー国王は外国訪問もままならず国政に多大な支障が生じた。このため昨年 3 月国王はナーフ内相を第二副首相に任命した。

外相のサウド王子はファイサル第三代国王とイファット王妃の間に生まれた、いわゆる第

三世代の王族である。1941年生まれの彼は秀才の誉れが高く、1964年に米プリンストン大学を卒業した後、石油省次官を経て1975年に外務大臣に就任しており、35年間にわたりサウジ外交の第一線で働いている。

このほか、中央政府閣僚にはミッテーブ都市村落相(アブドルアジズ初代国王17男)及びアブドルアジズ国務相(ファハド前国王子息)がいる。

(2) 王族州知事

サウジアラビアには13州の地方行政区がある。国土は日本の6倍近くあるが、人口は1800万人(外国人を含めれば2400万人)に過ぎない。人口はリヤド、ジェッダ及びダンマンの三大都市圏に集中しているが、地方では昔ながらのベドウィンの部族社会が幅を利かせている。従って地方の部族と良好な関係を維持し或いは彼らの不満を和らげることは州知事の重要な役割である。13州のうちではリヤド州、マッカ州及び東部州の3州は特に重要である。リヤド州は首都リヤドを擁する同国の中心であり、またサウド家発祥の地でもある。マッカ州は紅海沿岸に面し、商業都市ジェッダ及びイスラームの聖都マッカがある。そしてアラビア湾に面した東部州は油田地帯であり同国の財政を支えている。

かつては知事全員が第二世代或いは三世代の王族もしくはサウド家と深い姻戚関係を持つ王族であったが、最近ではテクノクラートの知事も任命されるようになってきている。しかし上述した重要な3州(リヤド、マッカ、東部)のほかイラク、イスラエルなどと隣接または近接する北部の州(タブーク、ジョウフ)やイエメン国境に近い南部の拠点アシール州などの州知事は今も王族が押さえている。

王族知事とその血縁関係及び年齢は以下のとおりである。

サルマン・リヤド州知事(故アブドルアジズ初代国王26男、73歳。スルタン皇太子実弟)

ハーリド・マッカ州知事(故ファイサル第3代国王3男、69歳。サウド外相異母兄)

ムハンマド・東部州知事(故ファハド第5代国王次男、59歳。)

ムハンマド・バーハ州知事(故サウド第2代国王次男、75歳)

ファイサル・カシーム州知事(バンドル王子長男、66歳)

ファハド・タブーク州知事(スルタン皇太子次男、57歳)

ファイサル・アシール州知事(故ハーリド第4代国王次男。年齢不詳)

ファハド・ジョウフ州知事(バドル王子3男。年齢不詳)

上記のうちサルマン・リヤド州知事を除く知事は全員三世代である。サルマンは1962年に首都リヤドの州知事に任命されており、実に40年近くその職にある。しかしこれは彼個人が有能であるというよりも、スデイリ・セブンとして故ファハド国王、スルタン皇太子、ナーイフ内相など兄たちに支えられてきたからと見る方が妥当であろう。

(3) 王族高級官僚

第二世代の王子にはスルタン国防相(皇太子)、ナーイフ内相、サルマン・リヤド州知事の

ように 20 代又は 30 代の若さでポストに就き、そのまま現在まで地位を保持し続ける者が少なくない。このため同じ第二世代でも若い王子たちは高位の役職に就くことが難しく、35 男のムクリン王子が中央情報局長官のポストについたのは 62 歳のときであった。

第三世代の男子王族は 2 百人を超えており³、ハーリド・マッカ州知事(69 歳)、サウド外相(68 歳)に見られるとおり、彼ら自身もかなりの年齢に達している。サウド家の世代及びポストの交代は遅々として進まず、しかも第三世代の王子が父親のポストを世襲する傾向が見られる。下記の高級官僚リストは、その特徴を顕著に示している。

- 国家警備隊： (第三世代)ムテーブ副司令官(アブダッラー国王 3 男)
(第三世代)マシャリ東部地区副司令官 (サウド第二代国王 32 男)
- 国防省： (第二世代)アブドルラハマン副大臣(初代国王 16 男)
(第三世代)ハーリド副大臣 (スルタン皇太子兼国防相長男)
- 内務省： (第二世代)アハマド副大臣(初代国王 31 男)
(第三世代)ムハンマド内相補 (ナーイフ内相 2 男)
- 石油省： (第三世代)ファイサル顧問 (初代国王 21 男トルキ王子 3 男)
(第三世代)アブドルアジズ顧問 (サルマン・リヤド州知事 4 男)
- その他官庁： (第三世代)バンダル国家安全委員会事務局長(スルタン皇太子長男)
(第三世代)スルタン青年福祉庁長官 (ファハド前国王 4 男)
(第四世代)ナワーフ青年福祉庁副長官(ファハド前国王長男故ファイサル王子長男)
- 副知事、市長： (第三世代)サウド東部州副知事(ナーイフ内相長男)
(第三世代)ミシャル・ジェッダ市長 (故マジド元マッカ州知事長男)
(第四世代)ファイサル・バーハ州副知事 (ムハンマド・バーハ州知事 2 男)

サウド家の王族が増え続ける一方、行政組織の高級ポストは限られている。このため第二世代の王族がそのポストを息子や孫など直系一族に継がせようとする強い動機付けが見られる。しかし世襲化はその反動としてポストを得られない他の王族の不満を招く。またこれまでは血の繋がった兄弟として強い結束力を誇ってきたステイリ・セブンも第三世代になり、異母兄弟或いは従兄関係に変化すると一枚岩ではなくなる。このことはファハド前国王が亡くなった後、ムハンマド東部州知事とアブドルアジズ国務相の異母兄弟の間で遺産相続をめぐる争いが起こったと言われていることから推測される。サウド家王族内部のポスト争いは、従来の単なる直系血族による縁故主義だけではなく、本人の能力、人望或いはカリスマ性などの属人的要素としての実力主義が加味される時代に移りつつあるのかもしれない。

(4) 有力ビジネス王族

これまでに見てきたようにサウド家の王族は主要閣僚、知事および高級官僚ポストを独占している。サウド家のこの強大な力をもってすれば、政官界のみならず経済界を支配することも不可能ではないはずである。それにもかかわらずサウド家王族の中にビジネスへ進出する者は殆どなかった。その理由として二つのことが考えられる。一つはサウド家の出自がベドウィンだと言うことであり、もう一つは建国から現代に至るサウド家と民間の大商人達との関係であろう。

ベドウィンは武勇を尊ぶ誇り高い部族であり商業を蔑んでいた。裏返して言えばベドウィンには商才という DNA が育たなかったとも言える。サウド家の王族にビジネスマンが育たなかった第一の理由である。第二の理由はサウド家がヒジャズ地方の征服に乗り出したとき、大商人達とギブ・アンド・テイクの関係を結んだことにある。ヒジャズ地方は当時からネジド地方とは比較にならないほど栄え、ジェッダやマッカ、マディナにはイエメンやレバノンなどから商人が集まり、巡礼者を目当てに幅広い商売を行っていた。

当時はまだ石油が発見される前であり、アラビア半島征服戦争に明け暮れるサウド家の財政は非常に厳しく、アブドルアジズは大商人達に財政的な支援を求め、その見返りとしてアラビア半島全域の商圈を保証した。こうしてサウド家と大商人達は、パトロンと庇護される者という関係を築いたのである。つまりサウド家は政治、外交、軍事及び警察の役割を担い、大商人達が経済を担うと言う関係である。その結果両者の間にお互いの領分を侵さないと言う暗黙の了解が生まれた。つまりサウド家の王族はビジネスに手を出さない、と言う不文律である。

第二次大戦後に石油の本格生産が始まるとこの不文律はむしろ強まったと言える。何故ならサウド家に莫大な石油の富がもたらされたことにより、彼ら王族はビジネスに手を染める必要がなくなったからである。そのような中で敢えてビジネス界に進出し成功した王族がファイサル第三代国王の長男故アブダッラー王子及び世界的に有名な富豪アルワリード王子である。

アブダッラー王子はアル・ファイサリア・グループを創設し、ソニー、仏ダノン社などの独占代理店としてサウジの国内市場に確固たる地位を占めている。因みにサウド外相はアブダッラーの異母弟である。Kingdom Holding を率いるアルワリード王子は 1955 年生まれで 54 歳、父親はアブドルアジズ初代国王の 18 男タラール殿下である。タラール殿下の母親はコーカサス出身であり、またアル・ワリードの母親モナ妃はレバノンの初代首相の娘である。

3. 後継者問題

アブドルアジズ初代国王以後の第二代から現在の第六代までの国王はいずれも彼の息子達である。その結果、各国王の即位時の年齢は第二代のサウドこそ 51 歳であったが、それ以降はファイサル 58 歳、ハーリド 62 歳、ファハド 69 歳と代を追う毎に高齢化している。アブダッラー現国王に至っては即位時に既に 81 歳であり、スルタン皇太子も今年 84 歳と言われている。サウド家にとって後継者の若返り問題が大きな課題である。

立憲君主制であれ絶対王制であれ後継者は殆どの場合、現国王(あるいは女王)の長男が承継するいわゆる長子相続制をとっており、サウド家のように兄弟間で王位が承継されることは現代社会では極めて珍しい。ただしベドウィンの部族社会を歴史的に見ると必ずしも長子相続が承継ルールとなっていない。ベドウィン社会では後継者はマジュリスと呼ばれる部族の長老会議で決められた。マジュリスで部族のリーダーとして最も相応しい人物が族長に選ばれるのである。過酷な自然の中、常に他の部族との闘争に晒されていたベドウィンにとって、単に族長の長男と言うだけで彼に運命を委ねれば一族滅亡の危険に晒されかねない。従って勇猛果敢で且つ仲間にも一目置かれる人物をマジュリスと言う合議体でリーダーに選ぶことがむしろ理に適っているのである。

長子相続制は長子の君主としての適格性の問題は残るもののルールとしては非常に解りやすい。それに比べて兄弟間の継承は内紛に繋がりやすい。サウド家のように多数の異母兄弟がいる場合は特に問題である。そのためには新国王が皇太子指名と同時に、更にその次の皇太子候補を明らかにして内紛の芽を摘む必要があった。

その結果生まれたのが第二副首相の指名である。サウジアラビアでは建国以来国王が首相、皇太子が副首相を務めている。そこに第二副首相のポストを設けたのである。第二副首相に指名されることは次期皇太子として暗黙の承認を与えられたことになる。こうしてハーリド国王―ファハド皇太子時代にアブダッラー王子が第二副首相に指名された。そしてファハドが国王に即位するとアブダッラーは皇太子となり、同時に第二副首相にスルタン王子が指名された。こうして現在のアブダッラー国王・スルタン皇太子の体制に至っている。

第5代ファハド国王の時代に「国家基本法」が制定された。「国家基本法」はサウド家がサウジアラビアの国王として行政・立法・司法の三権を掌握することを内外に宣言したものであり、(1)サウジアラビアは君主制であり、(2)アブドルアジズの子息及び孫(男子)に継承権があり国王が皇太子を指名すること、(3)立法、司法、行政の三権の拠り所は国王にあること、(4)国王は首相となり閣僚を任免すること、など絶対的な君主制を宣言している。

2000年に発足した「王室評議会」は皇太子を議長とする18名の王族で構成され、3分の2近い11名がアブドルアジズの直系子孫、残る7名はジャラウィ家など外戚の王子が任命された。これにより王位継承問題についてある程度の形式は整えられたが、皇太子の決定権は国王にあり、指名プロセスの不透明性が解消された訳ではなかった。

これに対してアブダッラーは即位後に二つの手を打った。一つは第二副首相を指名しなかったことであり、もう一つは自分が亡き後の新国王による皇太子指名について、国王の独断専行をチェックする「忠誠委員会」と呼ばれる組織を作ったのである。2006年10月、アブダッラーは勅令で「忠誠委員会法」を公布し、皇太子指名のプロセスを明文化した。「王室評議会」が一部の直系王族と及び外戚の18名で構成されていたのに対して、「忠誠委員会法」では外戚をはずし第二世代及びその直系王族で固めた。

委員会法では新国王が即位して30日以内に皇太子を指名するとされている。また国王或いは皇太子が重病となった時を想定して、3人の医師を含む5人の医療小委員会が設置され、

国王又は皇太子が執務不能になったか否かの医学的判断を行い、忠誠委員会に報告書を提出することになっている。

皇太子選定プロセスは、新国王が3名の候補者名簿を委員会に提出し、委員会ではその候補者の中から新皇太子を選定する。もし委員会が国王の示した候補者全員を拒否する場合は、委員会自らが独自の候補者を国王に提示する。そして国王が委員会の候補者に同意できない時は、委員会は先に国王が提示した3名の中から投票で皇太子を選出する、とされている。

従来の「王室評議会」に代わり「忠誠委員会」が設置されたことにより、これまで後継者選びから除外されていたムクリン王子のような王族にも皇太子選出に関与する権利が与えられたことは注目に値する。委員の中ではアブダラー国王と親密なタラール王子が皇太子選定の鍵を握る重要人物の1人と思われる。タラール王子は政府の要職につかずサウジ家庭医学協会会長など名誉職を務めている。そのため後継者問題については中立の立場で発言することができる。彼こそはまさにかつてサウド家の「マジュリス」を取り仕切った「長老」に相応しいと言えそうである。

このような中で昨年二つのことが大きな話題となった。一つはスルタン皇太子の海外長期療養であり、もう一つはそれによる政務の渋滞を防ぐためナーフ内相が第二副首相に指名されたことである。ナーフの第二副首相指名が注目されたのは、これまで第二副首相のポストがサウド家の王位継承順位を内外に示す重要なシグナルでもあったからである。つまり過去三代にわたって第二副首相となった者がその後皇太子となり、更に国王に即位しているのである。

しかし現在は「忠誠委員会」がありナーフの第二副首相就任と次期皇太子のポストは無関係ということになる。このことをはっきりと明言したのはタラール王子である。彼はナーフ第二副首相任命の勅令が出るや否や「これは皇太子の座を約束するものではない」と発言している。

スルタン皇太子は昨年12月に1年ぶりに帰国した。リヤド空港到着時の写真等を見る限りではやせ衰えた感は見られないが、高齢でもあり今後は予断を許さない。彼はアブダラー一亡き後の第七代国王になることが約束されているが、現国王より先に亡くなる可能性は否定できず、「忠誠委員会」による次期皇太子指名問題が現実味を帯びている。第二世代では1945年生まれのムクリン中央情報局長官などは年齢的には十分可能である。彼は36人の異母兄弟の中では下から二番目に若いためこれまで後継者問題で名前があがることは無かったが、アブダラー、スルタン、ナーフなどが老齢化した結果、彼自身が皇太子となるチャンスが巡ってきたとも言える。なおスルタン、ナーフの実弟であるサルマン・リヤド州知事も有力な後継者候補とされたことがあるが、筆者はサルマンの能力と性格は国王に適していないと考えており、年齢的にも彼が皇太子になることはないと思われる。

第三世代の有力な王族については、今年マッカ州知事になった1940年生まれのハーリド王子(ファイサル第3代国王子息)から1971年生まれのアブドルアジズ国務相(ファハド前国王子息)まで年齢に大きな幅がある。次期皇太子としては第二、第三の両世代にチャンスが

ある。第三世代の中でこれまで後継者(次期皇太子)候補に挙げたことがあるのは、サウド外相(1941年生、ファイサル国王子息)、バンドル国家安全委員会事務局長(1950年生、スルタン皇太子子息、元駐米大使)、アブドルアジズ国務相(1971年生、ファハド前国王子息)の3名である。このうちアブドルアジズが後継候補に擬せられたのはファハド存命中のことであり、現在ではその可能性は無くなったと見るのが妥当であろう。サウド外相は非スデイリ系王族の中では実力・人気ともに最も高く、かつてアブダッラー国王が彼を第二副首相(即ち次期皇太子)に任命するのではないかとの観測記事も流れたほどである。しかし彼には健康面の不安が残る。

このように次期皇太子が誰になるか推定することはかなり難しいが、あえて候補を絞りこむとすれば、上記の第二世代ムクリン王子、第三世代バンドル王子に加え、アブダッラー国王の三男ムテーブ国家警備隊副司令官、ナーイフ内相の次男ムハンマド内相補、スルタン皇太子の長男ハーリド国防副大臣、さらにはタラール王子の子息で世界的富豪として著名なアルワリード王子などが挙げられる。但しムテーブ、ムハンマド、ハーリドの3人は実力のほどが不明であり、またその肩書が示すように裏を返せば親の七光りでもある。次期皇太子を選定する「忠誠委員会」のメンバーが第二世代の王子本人或いはその子息により構成されていることを考えると、父親と余りに近すぎるこれら3人の王子はむしろ候補者としては不利であるともいえよう。またムクリン王子やアルワリード王子は、ナーイフが第二副首相になったことで、国王への道が遠のいたと感じ、落胆しているとも伝えられており国王後継レースは混沌としている。

外部の風を読むことに長けたアブダッラー国王は、多分サウド家内部に吹く風についても十分読んでいるものと思われる。彼は「スデイリ・セブン」なるものの結束が緩み、いずれ瓦解すると見ているであろう。サウド家による永続的な支配を悲願とするアブダッラー国王が恐れていることは多分二つある。その第一は後継者選びを巡りサウド家全体の不協和音が大きくなり外部勢力に付け入る隙を与えることであり、二番目はスルタン・ナーイフ兄弟という保守主義者による第二次スデイリ王朝が生まれることであろう。

以上

本稿に関するコメント、ご意見をお聞かせください。

前田 高行 〒183-0027 東京都府中市本町 2-31-13-601
Tel/Fax; 042-360-1284, 携帯; 090-9157-3642
E-mail; maedat@r6.dion.ne.jp

1 サウド家家系図: <http://menadatabase.hp.infoseek.co.jp/3-1-2%20saudtoabdulaziz.htm>

2 外務省ホームページによる。

3 Abdul Rahman bin Sulaiman Al-Ruwaishid 著のサウド家系図による